

優秀賞

「夜のピクニック」 恩田陸(新潮社)

健康栄養学科 近藤結女

「みんなで、夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろう」
これは本作を読み終えたとき、私が最も心に残った一節である。

2005年、第2回本屋大賞受賞作品。

主人公、甲田貴子は高校生活最後の行事である「歩行祭」で自分自身に賭けをしていた。内容は、今まで一度も話したことがなかったクラスメイトの西脇融に話しかけるというもの。しかし、話しかけることが出来ないのには恋心とは違う理由があり…。一昼夜かけて全校生徒で80km歩く北高の伝統行事「歩行祭」を舞台に物語は進行していく。見所は貴子の賭けの結末、そこに関連する転校した貴子の親友の一人である杏奈が去年かけておいたおまじないの謎。クライマックスで謎が解け、全ての蟄りが解消されて貴子、融、それぞれの親友である美和子、忍そして杏奈の弟、順弥の5人で最後の坂を上り、皆でゴールをくぐる場面、そして貴子が美和子に涙ぐみながら「ありがとう」という一連の描写はとても感動的かつ清々しい気持ちにさせてくれる。

ただ歩く。朝から次の日の朝まで。どれだけ億劫になることだろう。お昼を過ぎると話す話題も無くなり、足の痛みだけがひしひしと伝わる。そんな場面がやけにリアルに感じた。しかし年に一度くらいこんな日があってもいいのかもしれない。何気なく過ぎてゆく毎日は長いようで短い。だがこの瞬間は大人になってもきっと記憶に残っているだろう。皆がそれぞれのモチベーションで思い思いの歩行祭を過ごす。自分にとって大切な誰かとの歩行祭はただ歩くだけではない何かがある。だからこそ歩くという単純なことが特別なことに変化するのではないかと思う。自分だったら誰と歩きたいだろうか。また、個性豊かなクラスメイトから何処か自分の友達と重なる子がいたり、こんな子もいた！など青春を思い出しながら読み進めていくのも面白い。